

『1873年ウィーン万国博覧会 日奥からみた明治日本の姿』正誤表

下記のとおり誤植がございました。お詫びして訂正いたします。

- ・ 216 頁 8 行目、217 頁 1 行目、219 頁 1 行目：『奈良之道筋 壺』→『奈良之筋道 壺』
- ・ 220 頁 5・9・14 行目：『奈良之道筋 参』→『奈良之筋道 参』
- ・ 236 頁 2 行目：明治 2 年 (1969) →明治 2 年 (1869)
- ・ 244 頁 20・21・25 行目、245 頁 5・6・7 行目：「奈良の道筋」→「奈良の筋道」
- ・ 244 頁 16-17 行目：『東京大学史料編纂所附属画像 史料解析センター通信』→『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』

また、一部の書籍の 231 頁に下記の組版上のトラブルがございました。

(誤)

当時の写真プリント技法は、ガラス原板ネガ（陰画）に直接鶏卵紙を密着させて原寸で焼き出すコンタクトプリント法である。そのためガラス原板上の画像層が痛みやすいうえ、大量に同じ写真プリントを短期間に得るためには、同じ被写体のガラス原板ネガを複数枚準備することが、作業効率の上からも必要であった。しかし、写真家が自製していたこの時代のガラス原板は、その出来の善し悪しを決める薬品の調合は撮影時の温湿度や薬品の疲労度⁴⁴などにも左右されるうえ、写真館の指向性によっても異なっていた。そのため、⁴⁴実際の手業や薬品の調合は師匠から弟子へと口伝で教えられ秘伝とされてきた。それぞれの写真家が好ましいと考える鶏卵紙の写真プリントを得るためには、その基となるガラス原板ネガが重要となることはいうまでもない。よって、松三郎と九一は、同じウィーン万博出品品に対して、それぞれの機材と撮影方法で撮影していたと考えられる。

(正)

当時の写真プリント技法は、ガラス原板ネガ（陰画）に直接鶏卵紙を密着させて原寸で焼き出すコンタクトプリント法である。そのためガラス原板上の画像層が痛みやすいうえ、大量に同じ写真プリントを短期間に得るためには、同じ被写体のガラス原板ネガを複数枚準備することが、作業効率の上からも必要であった。しかし、写真家が自製していたこの時代のガラス原板は、その出来の善し悪しを決める薬品の調合は撮影時の温湿度や薬品の疲労度⁴⁴などにも左右されるうえ、写真館の指向性によっても異なっていた。そのため、⁴⁴実際の手業や薬品の調合は師匠から弟子へと口伝で教えられ秘伝とされてきた。それぞれの写真家が好ましいと考える鶏卵紙の写真プリントを得るためには、その基となるガラス原板ネガが重要となることはいうまでもない。よって、松三郎と九一は、同じウィーン万博出品品に対して、それぞれの機材と撮影方法で撮影していたと考えられる。

以上